

特集 竹村和子さんのフェミニズム／ジェンダー研究

竹村和子さんの急逝がもたらした欠落は、彼女自身や彼女の言葉に触れた全ての者にとって、今なお何をもってしても埋めがたい。彼女は、ジュディス・バトラー（Judith Butler）等の翻訳を通じて、最先端のフェミニズム思想を日本語で思考する手立てをもたらずと同時に、彼女自身がそうした様々な理論の検討を通して今日のフェミニズム理論の最も先鋭な問題に取り組み、それを自らの言葉で、ぎりぎりまで思考し、論じたことによって、今日フェミニズムを思考し、実践する者すべてにとって不可欠な理論的指針であり続けている。

本特集は、彼女の文学、映像、思想の領域における論考をそれぞれにまとめた形で出版された三冊の、最後の書籍を、私達編集担当者が現時点で最もふさわしいと考えた3人の評者の書評を通して再検討し、彼女が私達に残した成果と問題を明らかにすることを目指している。加えて、彼女の薫陶を受けた2人の若い研究者の研究ノートを通して、それが次世代にどのように引き継がれてゆくのか、という状況の一端を示すことも試みた。

たいへんお忙しい中書評をお引き受けいただき、真摯に竹村さんの言葉と向き合うことでこの上なく力のこもった論考をくださった3人の評者と、2人の若手研究者が身を持って示してくださったとおり、今回の企画が、竹村さんが残した言葉に一人一人があらためて向き合い、それを受け止め、それぞれに発展させることで、彼女の生命を絶やすことなく抱き続ける良き機会となれば、编者（天野知香と館かおる）の責は果たされるといえるだろう。

注記 なお、彼女の著作、翻訳書は、本誌で取り上げた『境界を攪乱する——性・生・暴力』に掲載されているが、竹村和子の思考の過程を跡づける資料として重要であると考え、初出論文一覧及び講演、セミナー、ゼミでの写真も掲載した。

語る者たちの連鎖の中で ——竹村和子さんのF-GENSでの活動を中心に

天野 知香

竹村さんは、2003年度から5年間、本学で展開された21世紀COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア——〈女〉〈家族〉〈地域〉〈国家〉のグローバルな再構築」(F-GENS)において、理論構築と文化表象を担当する「プロジェクトD」のリーダーとして、数々の内外の研究者等の招聘やシンポジウム、研究会の組織、データベース作成に携わった。その活動の記録はプログラム期間中に活動報告として毎年刊行された『F-GENSジャーナル』誌、およびこのプロジェクトのまとめとして出版された全五巻のシリーズの一冊として、竹村さん自身の編著になる『ジェンダー研究のフロンティア5 欲望・暴力のレジーム——揺らぐ表象／格闘する理論』（作品社、2008年）にまとめられている。竹村さん自身が考えたこの書籍のタイトルに挙げられているとおり、欲望と暴力の問題は、いみじくもこの時

期の竹村さんの思考の中核をなす問題であったと言って良いだろう。

このCOEでの竹村さんの活動を、プロジェクトDに参加したメンバーとして、振り返ってみると、この活動が、彼女の思考の展開とその波及において、著述とは別の側面を含めて重要な意義をもったものであったことが浮かび上がる。

その一面は英語圏の若い学生、大学院生を中心とした文献検討会等の活動がもたらした教育的な意義であり、その活発な活動は、このプロジェクトの教育上の成果に重要な役割を果たし、次世代を育てることになったことは言うまでもない。

竹村さんはまた、COEの活動として、日韓の研究者たちによる二度に渡るシンポジウム（その2007年の成果はプロジェクトD作成のCOE刊行物『文化表象の政治学——日韓女性史の再解釈』に記録された）の他、様々な海外の研究者の招聘に関わって講演会やセミナー等を実現し、その議論を日本の聴衆に開かれたものとする機会をもたらし、また対話を通して彼女たちの思想を批判的に考察する手立てを示した。そうした対話の相手は、トリン・T・ミンハ（Trinh T. Minh-ha）、エステル・フリードマン（Estelle Freedman）、ジュディス・ハルバーシュタム（Judith Halberstam）、エイミー・ウィリアムズ（Amy Williams）、ジョアン・コプチュク（Joan Copjec）、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Spivak）、そしてジュディス・バトラー（Judith Butler）といった、竹村さんでなければ受けて立つことのできない豪華なメンバーであったが、こうした研究者との対話は、竹村さん自身の思想展開とも深く結びついているのは言うまでもない。とりわけ本学の講堂が満席になるほどの聴衆がつめかけたバトラーの講演会と、そこでの応答は、竹村さんとバトラーの信頼に満ちたやりとりとともに、貴重な歴史的出来事として記憶される。

他方全体に関わるシンポジウム等の活動に目を向けると、そこでは竹村さん自身の思想的展開が直接表明される場ともなっていた。初年度の、このプロジェクトの「進水式」と竹村さん自身が位置づけた、2003年のプロジェクトDのシンポジウム「ジェンダー研究の理論と表象分析のいま——国家・資本・表象の共謀と攻防」では司会、発題として、「国家」「資本」「表象」をテーマの中心に据えている。近代における国家的枠組みと性配置のかかわり、さらには国家的枠組みやそこでの性制度を背景にししながら、国家の枠組みを超えて展開する資本の運動と、それを強化／逸脱する表象の緊密な関わりが前提とされる一方、こうしたいわば当時のジェンダー研究の基本的な認識からさらに一步踏み出して、近代の枠組み自体の液状化に伴ってひきだされる問題系に表象を通して取り組む方向へと関心を向けることを促している。

翌年の統括プロジェクトによる第一回シンポジウム「グローバル化、暴力、ジェンダー」で、発表者として登壇した竹村さんの発言「生と死のポリティクス——暴力と欲望の再配置」は、社会における欲望の認可・非認可を通じた自己形成とそれがはらむ他者への暴力に代わって、新たに浮上しつつある暴力の様態を分析するものである。竹村さんはこの中で、ジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben）の「ホモ・サケル」を巡る議論の盲点をつく形で、アブグレイブでの虐待写真を引きながら、現代の消費文化のシステムに従う中で自死的暴力に駆り立てられる、（非）主体形成のメカニズムを問題にする。

本特集の中で清水晶子さんの論考がきわめて適切に明らかにしているように、竹村さんにとって重要な関心の一つは、境界の攪乱がもたらす自己破壊的暴力と人間主体の液状化に伴う自死的暴力の問題であった。現実の暴力や暴力の表象の問題と、バトラーが提示したような構築された身体や性に関する観念的な境界の攪乱が実体化された歴史を持つ身体にもたらす暴力性を、人間主体の「液状化」を通し

て、ひとつづきの問題として考察の対象としたことは、竹村さんによる重要な問題提起といえるだろう。「暴力」の問題が、竹村さんにとって、このように一般に考えられるような現実の世界と、理論的な境界の攪乱という一見観念的な領域とを、繋ぐ形で問題化されたのは、映像や文学に関する齊藤綾子さんや越智博美さんの書評が明らかにしたように、竹村さんの理論が常に表象を通して思考され、具体的な感覚や感情に結びついており、何よりもその理論とそれを語る言葉が単に空虚な観念ではなく、文字通り身を切るような具体性を持って捉えられていたからに他ならないともいえるだろう。

第二回のF-GENSシンポジウムでも竹村さんは『美とエロティシズムと死』の領有——2つの三島映画（2009）と憲法改正」と題した発表で、表象分析を通して純愛プロットによる死の領有がはらむ政治的意味を論じ、さらに第四回では「人間と非人間——死をめぐる（バイオ）ポリティクス」と題して再びアガンベン思想に踏み込んで、人間と非人間の境界の液状化と暴力をめぐる議論を深めてゆくことになる。こうした彼女の発言の記録は上に挙げたCOEの出版物に残されているので詳細は省くが、このように見てゆくと、COEでの竹村さんの活動は、彼女のこの上なく希有な思想の展開を示す貴重な軌跡でもあったことがわかる。

『F-GENS ジャーナル』を手にとり、2004年当時のシンポジウムにおける竹村さんの発表に対する私自身のコメントを振り返ると、明らかに当時において、竹村さんの問題意識を的確に受け止めてそれを深めることはできていない。しかし、現在に至って、彼女の問題提起が私の中に深い痕跡をもたらして、折々に呼びかけ、その後の考察を促していることに気付かされる。おそらく、竹村さん自身やその言葉に触れた者達の多くが、様々な形で、多かれ少なかれ彼女から何かを受け取り、背中を押されてきたに違いない。その言葉を受けとめて、さらに語り続けること、それこそが、現在の状況の中で、生命をつなぐ手立てに他ならないだろう。

竹村和子さんとジェンダー研究センター

舘 かおる

竹村和子さんが、ジェンダー研究センターと深く関わった時期は、彼女が、魅力的で緻密なアメリカ文学研究者から、鋭利な表象研究者、そして稀代のフェミニズム批評理論家として大きな変貌を遂げて行く、そのプロセスと重なると言っても過言ではない。

竹村さんは、1996年4月にお茶の水女子大学に赴任した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センター（以下IGSと略）は、1975年に女性文化資料館として創設され、10年ごとの時限付き施設だったので、1986年に女性文化研究センターに改組し、そして1996年に再改組したところだった。まさにその直後に、竹村さんが私たちの前に現れたことは、何という幸運だったかと今にして思う。その頃の竹村さんは、まだフェミニズムを全面に掲げていなかったが、1年も経たないうちに、もはや躊躇することは何もないという勢いで、IGSの活動に参加し、研究協力員や研究員として研究プロジェクトを推進し、2000年4月からIGSの運営委員となり、21世紀COE「ジェンダー研究のフロンティア」(F-GENS)が終了する2008年3月まで、様々なかたちで成果をもたらし続けた。また、IGSに、研究機関研究員、研究支援推進員という、研究員と研究補佐の技官のポストが付いたことも、センターの活動を支える大きな力となったが、竹村さんは英文科のポスドク院生にこのポストへの応募を促し、彼女らはIGSの活動の中で力をつけ、女性学やジェンダー研究に造詣の深い英米文学研究者として就職していった。